

## 第4章

障害者スポーツ体験イベント

目指せ！未来のトップアスリート！

実施報告

## 障害者スポーツ体験イベント「目指せ！未来のトップアスリート！」を初開催



公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団（以下 YMFS）は神奈川県横浜市内の小学 4 年生から中学 3 年生までの児童・生徒を対象に、障害者スポーツ体験イベント「目指せ！未来のトップアスリート！」を、平成 28 年 1 月 30 日（土）に、神奈川県横浜市の障害者スポーツ文化センター横浜ラポール（以下、横浜ラポール）にて初開催した。

### 【後援団体】

横浜市教育委員会、横浜市小学校長会、横浜市中学校長会、横浜市小学校体育研究会、横浜市中学校体育連盟、公益財団法人日本障がい者スポーツ協会日本パラリンピック委員会、公益財団法人笹川スポーツ財団（順不同）

### 【開催の目的】

YMFS は、2012（平成 24）年度より障害者スポーツを取り巻く環境、特に障害者スポーツ選手の発掘・育成・強化について調査研究を行った結果、未来を担う若い選手が少ない現状や社会認知度の低さなどの具体的な課題を確認している。こうした背景から、子どもたちが、障害者スポーツの一つである車椅子バスケットボール体験を通して、そのあり方やその楽しさを知る機会を提供することを目的とした。

### 【当日の様様】

参加者 35 人（障害児 2 人／健常児 33 人）、指導員、視察者、保護者、報道、行政機関、教育機関、YMFS 調査研究委員会など、およそ 100 人が参加した。

最初のプログラムには、イベントゲスト・根木慎志氏（2000 年シドニーパラリンピック車椅子バスケットボール男子日本代表キャプテン）による講演会である。自身の体験談を交えながら車椅子バスケットボールの魅力を伝えるとともに、障害者スポーツの歴史や現状について紹介された。2 つ目のプログラムは、横浜ラポールの指導員と現役の車椅子バスケットボールプレーヤー（横浜ドリーマー、湘南 SC 所属）によるエキシビジョンマッチである。その上で、3 つ目のプログラムでは参加者による実践練習を体験した。

この実践練習ではスポーツ用車いすの操作練習に戸惑う様子がみられたが、鬼ごっこやボールを使った練習になると操作にも慣れ、笑顔にあふれた。最後のプログラムとなった模擬試合では、全員が汗を流し、大きな声を出して真剣に取り組む様子がみられ、車椅子バスケットボールの楽しさを肌で感じていた。

### 【イベントゲストのコメント】

根木 慎志氏

（シドニー2000 パラリンピック車椅子バスケットボール男子日本代表キャプテン、一般社団法人日本パラリンピアンズ協会副会長、日本パラリンピック委員会 運営委員会 委員）

私は高校生の時に交通事故で車いすに乗るようになりました。元々、スポーツが大好きで、柔道、水泳、サッカーをやっていましたが、障害者スポーツのことはまったく知らず、車いす生活になったことで、何もスポーツができなくなったと勝手に思っていました。それが、入院中に車椅子バスケットボールの選手と出会い、この競技について知りました。競技を始めたのは、その選手のイキイキとした姿をみて、もう一度、自信を取り戻そうとしたのがきっかけです。そして、先輩たちの姿に憧れ、競技にのめり込み、最終的にはパラリンピックに出場しました。今回はテーマとして、“目指せ！未来のトップアスリート！”とあるように、障害者スポーツ競技を知り、体験してもらうことがまず大切で、これを機にオリンピックやパラリンピックに出たいと思ってくれる子どもが、一人でも出てくれればうれしく思います。更に、スポーツで自信を取り戻した私や、他の指導員の姿を通して、スポーツには、様々な可能性があることを伝える場でもありましたが、きっといろいろと感じ、考えてくれたのではないかと思います。



### 【横浜ラポール関係者のコメント】

山川 洋氏

（横浜ラポール スポーツ事業課 指導担当課長）

“目指せ！未来のトップアスリート！”というテーマからもわかるとおり、このイベントは若い選手の発掘や体験が目的ですが、車椅子バスケットボールを知ることそのものも、将来の応援者を増やすという意味では、大きな意義があると感じました。

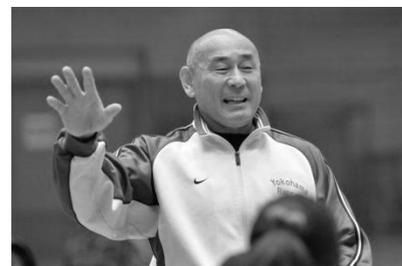


また、参加者募集の際、横浜市内の小中学校を対象とすることで、障害者のスポーツを体験する機会や横浜ラポールのような施設があることを知ってもらえるきっかけになったことも大きな成果だと思っています。一方で、参加した35人の内、障害のある子どもは2人だけでしたが、これは、障害者自身が主役となってスポーツを行う機会が少ないことや、そもそもスポーツをする習慣が無いことが原因と思われる、改めて課題の大きさを痛感しました。今回の活動は、スポーツ界全体や競技団体を動かすものではありませんが、教育現場や自治体への影響を考えると、こうした草の根活動が、東京2020パラリンピック競技大会開催へ向け、状況を変えていく下地としてとても重要になると考えています。今後もYMFSには、さらなる活動に期待したいです。

伊藤 俊之氏

(横浜ラポール スポーツ事業課)

たくさん子どもたちが参加してくれましたが、これは先生や保護者のおかげであり、サポートする皆さんの考え方や視野の広さがとても重要だと感じるイベントとなりました。障害者スポーツは大変だ、という固定観念が強くありますが、指導においては、工夫次第で障害者・健常者にかかわらず楽しめることを、参加した全ての方に感じていただけるよう心がけました。



特に、子どもたちには一度に多くのことを伝えても、その全てを理解させるのは困難です。車椅子バスケットボール体験を通して、車いすのを知り、更には障害者のことを知るきっかけになればと考えながら指導にあたりました。障害のある子どもたちは、自分もスポーツが出来るというイメージを持っていない人がほとんどです。特に先天的に障害のある子どもは、保護者を含め障害者スポーツについての情報や知識を得る場所が多くないので、スポーツをやるという発想自体が少ないのが実情です。だからこそ、みんなが普通にスポーツを楽しめる環境作りへの一歩として、このイベントはとても重要な機会になったと思います。

#### 【YMFS 調査研究委員会 委員のコメント】

藤田 紀昭氏

(同志社大学スポーツ健康科学部 教授/YMFS 調査研究委員会 委員)

今回は車椅子バスケットボールの体験でしたが、水泳、陸上、ボッチャなど、障害者スポーツには様々な競技があります。参加した子どもたちの表情から、障害者スポーツを楽しんでいることは伝わりましたが、今後も横浜ラポールなどの施設を活用して、別の競技にもぜひチャレンジして欲しいと思います。



また、横浜市教育委員会や神奈川県立体育センターなどの教育関係団体から視察に来ていただきましたが、現在、文部科学省のオリンピック・パラリンピック教育についての有識者会議でも、学習指導要領の改訂でパラリンピックを取り上げることが決まろうとしています。教育関係者の皆さまには、障害

者スポーツの楽しさ、パラリンピックの素晴らしさや凄さを積極的に伝えて欲しいと願います。

#### 【主催団体 YMFS 代表のコメント】

杉本 典彦

(YMFS 事務局長)

YMFS は設立当初より、自己の夢・目標にチャレンジするアスリートや指導者、研究者などの活動を助成するスポーツチャレンジ助成事業を行ってきました。そこで障害者アスリートと出会って、様々な課題があることを知り、4年前から障害者スポーツの調査・研究に取り組む中で、10年先を担う若い選手が少ない状況や、障害者スポーツの社会認知が低い現状など、具体的な課題が浮かび上がってきました。そこでYMFSは、こうした課題の克服に向けた一歩として子どもたちを対象とした本イベントを開催することにしました。今回は車椅子バスケットボール体験でしたが、障害のある方もない方も、ともに汗を流して、障害者スポーツの楽しさに触れていただけたように思います。小さな一歩ではありますが、こうした活動が少しでも広まって障害者スポーツ界が盛り上がり、若い選手が現れてくれることを期待しています。



#### 【参加者・視察者の声】

本体験イベントに参加・視察された方々から得たコメントの一部を紹介する。

・普段からパラリンピアンを中心とした競技選手や、選手による小学校での講演や体験会を取材している。今回子どもたちがみんなイキイキと楽しそうで、もっともっとやりたいと感じてくれたように見えた。東京2020オリンピック・パラリンピック開催決定後、パラリンピックを応援してもらう目的のイベントが増えているが、今回のように実際に障害者スポーツ競技をやってもらうイベントは少ない。新たな試みとして、今後も継続して欲しいし、社会的にもこういう機会がもっと増えていって欲しいと思う。(視察者・報道関係者)

・またやってみたいです。普段は野球などをやっていますが、車いすを使ったスポーツは初めてです。車いすを実際に使ってみて、今後、車いすに乗っている人を見かけたら助けたいと思えるようになりました。(参加児童・生徒)

・前に車いすに乗ったことはあったが、車椅子バスケットボールは初めて経験した。とても難しかったけれど、シュートが入った時は嬉しかったし、楽しかった。また、車いすに乗っている人の大変さもわかりました。今はスポーツをしていないが、いつかやってみたくなった。(参加児童・生徒)

・これまで車いす経験もなければ車いすのことを考えたこともなかった。今回体験してみて車椅子バスケットボール選手の人たちは車いすに乗っているのに、通常のバスケットボールよりシュートがドンドン入り、本当に凄いなと感じました。イベントを通じて、車いすのことや、選手の皆さんのことを知る貴重な体験ができて嬉しく思いました。(参加児童・生徒)

・日頃出来ない体験が出来て楽しかった。選手の皆さんはハンディキャップがあるにもかかわらず、僕たちと同じバスケットボールをやっていて凄いと感じました。なかなか実感はできませんが、身の周りに障害のある方が困っていたら自分に出来ることをしてみたいと思った。(参加児童・生徒)

・僕はバスケットボールをしています、いつもと違った体験ができそうなので参加しました。普段はジャンプしてシュートしていますが、車椅子バスケットボールは座ってシュートするので、うまく力が入らず難しかったです。でも、とても楽しくて、またやってみたいと思いました。(参加児童・生徒)

(藤田紀昭)

